

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
教育研究評議会（第24回）議事要旨

1. 日 時 平成22年5月10日（月）10：30～12：15
2. 場 所 自然科学研究機構事務局会議室
3. 出席者 佐藤議長、井上評議員、金子（章）評議員、郷評議員、小間評議員、佐藤評議員、廣田評議員、木下評議員、小森評議員、岡田（清）評議員、岡田（泰）評議員、大峯評議員、勝木評議員、櫻井評議員、金子（修）評議員、池中評議員、小杉評議員
（陪席者）
武田監事、野村監事
（庶務）
増田事務局次長、鈴木総務課長、平尾企画連携課長、長谷川財務課長
ほか

（順不同）

4. 配付資料

- 1 教育研究評議会評議員名簿
 - 2 教育研究評議会（第23回）議事要旨（案）
 - 3-1 教育研究評議会概要
 - 3-2 国立大学法人法（抄）
 - 3-3 自然科学研究機構教育研究評議会規程
 - 3-4 自然科学研究機構教育研究評議会規程細則
 - 4 経営協議会委員名簿（案）
 - 5-1 自然科学研究機構組織運営通則（抄）
 - 5-2 自然科学研究機構機構長選考会議規程
 - 5-3 教育研究評議会外部評議員名簿
- 当日配布 機構長選考会議委員（案）
- 6 自然科学研究機構（概要）
 - 7 平成22年度教育研究評議会の開催日程

5. 議事等

議事に先立ち、議長からの挨拶及び評議員の紹介、定足数並びに配付資料の確認があった。

1) 前回議事要旨（案）について

教育研究評議会（第23回）議事要旨（案）について、一部修正の上、了承された。

2) 教育研究評議会の関係諸規程について

資料3-1から3-4に基づき、事務局から教育研究評議会の関係諸規程について説明があった後、議長から教育研究評議会規程第3条第2項に定める理事に木下理事が指名された。

3) 経営協議会委員について

資料4に基づき、佐藤議長から経営協議会委員について説明があった後、了承された。

4) 機構長選考会議委員について

資料5-1から5-3に基づき、事務局から機構長選考会議委員について説明があった後、審議が行われ、井上評議員、金子評議員、小間評議員、笹月評議員、佐藤評議員が選出された。

5) 機構の概要について

資料6及び機構パンフレットに基づき、議長から機構全体の概要について説明があった後、各機関長及び櫻井評議員等からそれぞれパンフレット等に基づき各機関の概要等について説明があり、意見交換が行われた。

(主な意見等は以下のとおり)

- 自然科学研究機構になる前は、他の機関はそれぞれ独立していたわけだが、機構化したことによって、大きく変わった点又は進んだ点など、プラスの効果があった点はどのようなものか。
- 事務について、人事事務を機構にまとめて効率化を図っている。また、機構の各研究所で使わなくなった資産の有効活用について、機構全体で取り組むことにより有効に機能するようになってきている。機構として新しい分野の創成に取り組むため、ブレインサイエンス研究分野とイメージングサイエンス研究分野の2つの分野の創成に新分野創成センターを設置して進めている。前期の努力によって良い方向に向かっていると思う。
- 自然科学研究機構は、5機関が学術研究という点で非常に優れている。それまでは、その分野の言葉でしか話さなかったが、会議又は集まりを通して共通の言葉で話せるようになった。そのひとつが、イメージングサイエンスである。これは、国立天文台の4D2Uを活用して、いろんな階層レベルをどうやって繋ぐかということが学問になるということに気が付き、今まで見たこともなかったものを見るという、手法が入ってくるということで、飛躍的な新しい分野になるのではないかと考えている。結果的ではあるが、学問の楽しさということで、集中できるようになった。ブレインサイエンスについては、コミュニティーからの強い要望があったということがあった。ブレインサイエンスが更に進んでいくということで、自然科学研究機構の研究機関は5つであるが、実際には他大学等に少し広く考えながら、やっていくという方が、非常に面白い集まりを作れると思っている。

- 国立天文台と核融合科学研究所は、ある意味では領域的に、オンリーワンと言ってもいいかもしれない。それに対して、岡崎の3研究所は、大学等にも同じ分野の研究機関、研究あるいは教育も含めてあるわけで、そういう意味では環境的な違いがある。そういうものが一緒になっているというところで、どうしても岡崎の3研究所と、核融合科学研究所と国立天文台は、組織的にフィロソフィーの違うところが一緒になっている。そこで、イメージングサイエンスは、共通的であるということで、かなり早くからやっているが、イメージングサイエンスに対して、もう少し、国内の大学等に対して、積極的に本当のリーダーシップをとっていただきたい。何かそういうものが出てくれば、自然科学研究機構として、何かいいところが出てくるのではないかと思う。外から見ると日本における最先端の研究というところが、少し見えにくい感じがします。
- イメージングサイエンスには、理化学研究所のシミュレーションと重なる部分があるが、我々は、装置を使うイメージングサイエンスをやるには、残念ながら資金等もないので、むしろ、お金が要らない基本的なところのテーマを作れないかということで、今、議論を始めている。非常に根本的な学問の構築になるということで、現在、教授会議で大いに議論をしている。今年中には、それらのいくつかテーマを選んで、そしてそれを機構外にも開いて、研究を始めたいと考えている。
- 自然科学研究機構のイメージングサイエンス分野で、マテリアルというよりは、むしろ、インテリジェント、知的なところで、是非、日本のリーダーシップを取ってほしいと希望している。
- 一緒になったことを生かすことに今後とも努力していきたいと思う。まだ途中段階で、今大きな成果が得られているわけではないが、いろんなアプローチをして、5機関が一緒になったメリットがあることをこれから行いたい。まずは、5つの機関の研究を更に推進して大きな成果がでるようにすることが大事であるので、努力していきたいと思う。

6) その他

① 教育研究評議会の開催日程について

資料7に基づき、議長から平成22年度教育研究評議会の開催日程について説明があった。

② 自由討議について

議長から、自由に御意見を伺いたい旨の発言があり、意見交換が行われた。

(主な意見等は以下のとおり)

- 国全体として限られた資金の中で、研究を今後どうするかということは考えなければならないことだと思うが、仕分け作業の中で議論があまり深くなく、全体のことを考えた議論になっていないことを大変心配している。特に、大学共同利用機関に対して、具体的な動きがあるのか、あるいは、機構が前もってそれに関連して説明責任を果たすなどの考えがあるのか、その状況をお伺いしたい。
- 非常に大事なことで、具体的に仕分けに関して何か言われたとかそういうことは

ない。ただ、私達は、いい加減な議論が出ると大変だということを心配している。国の財政を考えたときに、どれだけ、未来のための投資である研究に投資ができる国なのか、その点は、私達も真剣に考えなければならないと思っている。ただ、誤解に基づいて言われると困るので、それに対する対応を考えておかなければならないと、他の大学共同利用機関法人の機構長も心配している。ボトムアップの研究機関が重要であるとか、トップダウンの研究所とは違うものが必要だとか、何でも一緒にすればいいということではないとか、そのことを機会があれば皆さまからも発信していただければありがたい。

- 学術研究に対し、国として効率の観点から方向性を絞るということは、一方では必要だと思うけれども、学問は、当初、トップダウンで考えた以外のところから成果が次々と出てくるものなので、その下地をきちんと保証しておかないと、国の学術は発展しない。その代表が、大学であり大学共同利用機関のような基礎的な研究を担うセクターだと思う。法人化の時に、我々は説明責任を十分に果たしていなかったと痛感した。公費を使っている以上、説明責任は、きちんと果たしていかなければならないので、その点は、私どもも含めて、全員がいろんな形で努力しなければならないと思う。
- 国民の目には大学共同利用機関は、見えていない。そういう意味では、我々の努力が不足していると思う。その点、私ども全員で、頑張って使命を果たしていきたいと思う。今後、社会に対してボトムアップの研究の大事さと、大学共同利用機関法人を十分に理解してもらおう努力をしていきたいと思う。

以上